

1940 年代文学研究の基底

—『迷路』を座標軸としてたどる能楽界の戦中期—

(附) G H Q 検閲の事ども

棚 町 知 彌

はじめに

ラムプひきよせふるさとへ、書いてまた消す湖畔の便り

昭和19年より20年にかけて、帝国陸軍教育の「フルコース」1年を受けた棚町は、最若年齢（徴兵が1年繰り上って19歳）にあった。杭州→上海→北京、1カ年の兵営生活で最も愛唱されていたのは、まちがいなくこの歌であった。

当時のベストセラー火野葦平の『麦と兵隊』など、いわゆる兵隊三部作は戦記物というよりも「ふるさと」への「たより」そのものであった。

『迷路』の最終部のハイライトは《万里子の手紙》であり、中盤より終盤への「やま場」は《慎吾の日記》である。いや、『迷路』そのものが、菅野省三の日記である。

1930年代後半より40年代前半にかけ、ジャズやダンスが圧迫されるころ、能楽界は「国体明徴」・「復古調」としてあきらかに追い風をうけた。文楽で「肉弾三勇士」が上演されたころ、『忠霊』とか『皇軍艦』とか、戦時新作能も大分つくられたが、今日にほとんど知られていない。

昭和初期の「大正リベラリズム」より、いわゆる戦時に入ったのは「紀元は二千六百年」の昭和15年（1940）か。いわゆる、学徒出陣世代は『オーケストラの少女』ディアナ・ダービンに熱狂したし、李香蘭の日劇7回り半は、わが中学生時代の事件であった。戦前に出来ていた映画『風と共に去りぬ』は一般日本人には観られなかった——占領地などで、そして特殊な人々は内地でも観ていたが、なぜか、G H Qはこの映画をアメリカ映画全盛期の占領中、日本人

に観させなかった。『風と共に去りぬ』のアメリカ北軍は、広島・長崎のアメリカそのものであったからではないか。

初期GHQ検閲の主眼は(軍国日本・日本帝国)臣民の「洗脳」にあった。主眼・重点が「米ソ対立(→レッド・パージ)」へとかわってゆく全検閲期間を通して、少しも変わらなかったのは、CCD業務・人員の8割以上を占める、いまのイラクやかつてのベトナム、あるいはレジスタンス中のフランスと「本質的に少しも変わらぬ」敵地・日本に対する「戦闘のための」情報収集をになうコミュニケーション部門(ポスタル&テレコム)であった。プランゲ文庫で判るのは「ほんの一部」活動にすぎないという再認識が基本的に求められる。

20年以上ものむかし、前田藩・細工所の「本役兼芸」の制を是非調べてほしいと竹本幹夫先生に請うたのは、白山連歌にはじまる前田家文事解明の一端としてであり、いかに浮気症とはいえ、棚町自身が能楽を云々する気は毛頭なかった。

10年まえに近松研究所を退くすこし前、尼崎市の近松関係の集りの席で、林裕三氏といわれる、むかし、大阪の第二地区検閲局(CCDⅡ)で棚町同様のポジションにおられたという10歳以上年配の方から、終戦直後の文楽天覧や仮名手本忠臣蔵解禁・上演などの写真アルバムを研究所に寄贈いただいた(詳細は写真入りで「横手聞き書き」の三に収めた)。当時はGHQ検閲の昔咄などを公表するつもりはなかったので、有難くいただいたままであったが、3年ほどまえになって、何か当時の資料は御宅にございませんかと御子息・隆三氏におたずねした。はじめは、一切お棺にいられたようですというお答えであったが、これが見つかったと御丁寧に3部の写しまで添えて送っていただいたのが、早稲田大学演劇博物館のCOE報告第9号にマートライ・ティタニラ氏により報告された『NO PLAYS』という英文タイプの資料である。「神楽」に準じて、能も検閲の対象からはずされたらしいという『歌舞伎を救ったアメリカ人』フォービアン・パワーズ氏(間違った証言もあるが)をはじめ、最近のプラン

ドン教授にいたるまでの通説に反し、大阪では能の検閲が検討されたという、唯一貴重な資料である。カブキの「フューダル・ロイアルティ」が初期検閲の（日本人洗脳）眼目であれば、歌舞伎のもと能楽が対象を外される筈はないが、東京の日本人スタッフも、小生もダイザ氏から、能楽もどうかと問われても、終戦直後、福岡で能楽の公演はなかったことをよいことにして、なるべく外されるように答えたはずである。『虎の尾を踏む男たち』（女優のいない勧進帳）の撮影がピクトリアル・センサーたちのはじめの現場であったにしては手ぬかりであった。尤も、東劇・寺子屋（首実験）の一件にしても、日本人のタレコミがあつての動きであつた。戦後史の研究としては、カブキ検閲を云々するよりは、このタレコミの手紙を探す方がよっぽど大切だと思う。

マートライ氏へ調査を依頼したとき、未詳とした、該資料の作成者とおぼしきY・H氏は、（隆三氏から、裕三氏に謡曲・能の御趣味はなかったようにうかがったので）誰か関西の能楽専門家かと推定したが、マートライ氏の「能にあまり詳しくない人」という推定から、林裕三氏こそこの資料の作成者であろうと今では判断する。マートライ氏に、能の検閲があつたとか無かつたとかは大したことでない。この際、当時戦時中の能楽人がどのように「八月十五日をくぐりぬけたか」を『迷路』の記事を道しるべにしらべれば面白い論文になるとすすめたことであつた。マートライ氏はそちらに手を出さないで、旧知の能専門家諸先生にご相談したあげくが、とうとう自分でせねばならぬ羽目になった、というのが当検討のそもそもである。法政大学能楽研究所に4、5回お邪魔して、江口さんや柳瀬さんに見つけていただいた資料を一先ずざっと目を通して、これからが詰めの調査をと予定した10月中旬（勤めの頃とちがひ、終日専念できるいまは3週間でする！）から風邪で寝込んでしまい、まず資料集成にまどめるつもりが、資料抄にとどまってしまった。

55年まえ、最初の論稿＝卒業論文を本文なしの序章だけで提出した報いか、最期の論稿となる本稿は、本文なしの跋文だけを出す羽目となった。それでは事務担当の方に迷惑を掛けるので、むかし7回も当集会の事務方を担当した者

として、発表の依拠した70年前の印刷物抄の復刻を以て口頭発表の原稿に代えさせて頂く事にする。

本発表の目指した「1940年代の文学」研究の基底を考えるに当り、文学史の近世と近代を分つ大きな時代区分としては、明治維新よりも「8月15日」の方がより適当ではないかということがその第一点である。専らこのことに向けての本発表の後半、終戦後の5年間、いわゆる被占領の時代（実はこの〈占領〉ということばに対する異和感が小生主張の根源なのだが）の視座よりの部分は、『演劇研究』29号拙稿の続きとして載せていただけるようになったので、すでに6篇も語ったり書いたりしたことでもあり、本稿では割愛させていただく。

戦前・戦中期を語るに当時「能楽の実態」を以てするという発想は間違っていなかった。要するに「高度国防国家」の建設には「日本精神の昂揚」が何よりも大切であり、それには「能楽の振興」が最適という能楽界の主張が、その「過剰な自信」を割引きさえすれば、当時の国民思潮の縮図として当を得ていることである。小生がここに引用紹介する資料を御覧になって、当時の能楽界はこんなに軍国的であったかと考える方が多いと思う。しかし小生の見立ては反対である。当時まだ10代後半ではあったが、規模小なりといえども旧制高校の報国団長（生徒会長）をつとめ、同校の学徒出陣式には在学生代表として壮行の辞を読んだ小生に比べると、当時の能楽界ははるかに冷静沈着であったと評価せざるを得ないからである。例の観世の新式能「忠霊」が——楽界誌々面をスキャンすればたしかに目立つけれども、能楽界の大勢は「忠度」の方が最後まで、いや戦争末期になるほど、「忠霊」より重くなった、ということを認めるからである。

R・S・になる可能性はあったわれわれが良識の牙城と思っていた岩波に右翼壮士がおしかけた時、岩波は自分背後の「五箇条の御誓文」を指すことで撃退したと当時きいたような気がする。後に安倍能成の書いた伝を見たらそんな話は出ていなかった。ことがあまりにも陳腐すぎるので、安倍は書かなかった

のだと思う。資料抄第三章の陳情書「能楽の特異性」に、阪神能楽組合は上手くこの切り札を使っている。さて、第二章冒頭、梅若六郎の明治神宮奉納芝能は、なんと真珠湾の2日前であった。つづく在満・梅若流師範の文章「夏炉冬扇」には、満州における梅若流優位がうかがわれる。満鉄の偉いさんに梅若流がいたと考える。たしかに、満州事変勃発の日、梅若景英は満州の地をふんで居た。昭和17年建国10周年慶祝使節を梅若六郎が勤めるのには10年間の実績があった。満州はこの時代、日本人のパラダイス=にげ場(ユートピア)であった。引揚げの惨状ばかり語られているが、18、9年の頃になっても、満州行きはつづいていた。「満州娘」はまだ歌われていた。

17年の秋、大阪観世・大西重久一行の大陸進出を囃子方・下村英一の報告した文章には、10月14日奉天市に於ける梅若会と観世会との同日催会が、両方とも満席であってよかったとニア・ミスのように記しているのは、横綱喧嘩せずのゆとりか。新式能「忠霊」への力の入れ方というか、優等生競争とかに、観世の対梅若「あせり」を感じるの、俗人小生の深読みにすぎるであろうか。能楽界今期最大の難問となった「技芸者之証」問題にしたところで、最後の難点は梅若だけが早ばやと取得したことにあつたようである。大牟田・荒尾両市の間に作った工業高専の学生部担当として、いわゆる三池闘争なるものは労資の対決ではなく、新・旧両労組間の闘いであると体感したことを思い出させた。

ねがわくば「戦時期における能楽師の研究——その実態ことに人間関係について」という研究がプロパーの方によってなされることを切望してやまない。

依拠資料抄 第一章 総記総論にかえて

第一節 能楽界半歳【昭和十六年前半】の回顧 『うたひだより』通算145号(能楽年報・昭和16年上季号より) 【江島伊兵衛・執筆と思われる】

○一月二日能楽会は華族会館で名刺交換会を行つたが、例年の東照宮御謡初は三日午後一時より催され、能界も新たに年を迎へたのであつた。

○観世会では十二歳の少年宗家元正氏大いに元気で千歳を勤められたこと、能

界の為喜ばしい事であつた。初役との事である。将来が期待される立派なものであつた。

○初会に高砂が出たのは観世と宝生とであつた。観世は梅若万三郎氏、宝生は家元重英氏である。宝生の翁は御曹子重雄氏、入営を前にした氏の翁は、落着きといひ、気合といひ印象の深いものがあつた。高砂は流し八頭の小書が出て相生の松の作物が出た。舞は面白いものであつた。

○近藤乾三氏の東北は堅実な風格の中に充分面白い趣きのある能として新春を楽しむことが出来た。

野口兼資氏の船弁慶は矍鑠として美しいキリであつたのが眼底に残つてゐる。

○一月二日には京都で能楽会といふのが創立された。能界の繁栄の為喜ぶべきであるが、東京の能楽会とどういふ関係になるかは不明である。

○十九日には金沢で定期の能が催されたが、東京からは宝生の若宗家が出向せられ、盤渉の小書附きで羽衣を演ぜられた。同地では最近毎月東都の宝生若手を一人づゝ招聘して人気を一新した。

○宝生流はこの一月二十一日より二十九日迄、厳寒のさ中を、一般同好の為に、職分の修業の一端を公開して寒稽古を行つた。参会者二百余人、その盛大な行事は雑誌宝生三月号に日記及び感想を載録して遺憾なく報道されてゐる。水道橋の能楽堂を会場として行はれたのだが、大分全能楽界の話題となり、来年の冬は他流でも真似ようといふ話があるさうである。地方でもその計画がある由である。何も宝生の専売では無いから 全国的にこの種の鍛錬の行事が催され、ば 謡曲報国の実が揚つて愉快的こと、思ふ。大阪の宝生流では夏期鍛錬会の企てもある由である。

○二月二十日に宝生宗家嗣子英雄氏は国家の干城として入営された。その歓送会壮行会は各方面に催され、前途を祝福されたのであつたが、東京音楽学校の先生として入営されるのは氏が始めてゝあるとして 乗杉校長も大いに肝を入れ、二月八日には東京音楽学校宝生会主催の下に盛大なる壮行謡会が駒込染井の能楽堂で催された。

○三月一日赤坂能楽堂で第三回能楽鑑賞の会が催された。野口兼資氏の景清に始まる。松門の気魄場内を圧して非常な渋味を味つた。能の良さを泌々と、事新しく感じさせられたやうだ。野村又三郎氏の狂言茶子味梅は愉快なものであつた。此舞台を最後として同氏の姿は東京の能楽界から消えた。葵上を金剛巖氏が演じた。金剛の能も面白いものである。能楽鑑賞の会とは良いものが出来たものと思ふ。この会は六月六日には能面能装束の鑑賞会を催し、金剛宗家が自ら所蔵の秘宝を手につけて説明をし、非常に有益な会であつた。

○三月十五日、十六日の両日宝生会能楽堂で、観世清之、同喜之追善能が行はれた。宗家元正氏は吉野天人の天人揃を演じた。可愛い少年が五人、美袖を翻へして舞ふ廻り、見所は感嘆にどよめいた。

○二十一日大曲の観世会能楽堂で故観世左近氏三周忌追善能が催された時は少年宗家元正氏が鷲を演じた。万三郎氏のツレはさすがである。この演出は例の時局に鑑みた五流申合せにより多少演出が変へられた。この追善催能は翌二十二日素謡のみを第二日とし、二十三日には第三日として能が演ぜられた。初日の翁は父尉延命冠者で万三郎氏、第三日目翁は十二月往来で観世友資氏が勤められた。喜之追善の能、廿四世宗家追善の催しは京都でも大阪でも盛大に行はれてゐる。

○三月二十七日には泰国皇族ワンワイ、タイヤコン、ワラワン殿下が仏印交渉の泰国首席全権として御多忙の中を 宝生会能楽堂にお成りなされ、宝生流能楽「鶴飼」を御覧になつた。妃殿下ビバアルン姫御同伴、セナ公使等と共に御鑑賞、御機嫌麗はしく御帰りになつた。当日シテは野口禄久氏であつた。

○四月ともなれば気候も上々、気分もうきうきとして 誰しもが謡を謡つてみたくなる気候である。

○四月三日午後八時より AKのスタジオより 宝生宗家のシテで「謡曲」石橋が放送された。ほとんど毎月 各流交替で謡曲が放送されるのはよろこばしい。ラヂオ出演については問題が多い、各流ともに自流のが少いと思ふのが人情である。中には出演回数を流儀の大小に比例させよといふ説もある。

○四月二十七日の日曜には宝生会の臨時別会能が行はれ、三川清師が「道成寺」を披かれた。この別会は宝生流の中堅楽師総出演で 期待以上の成果であつた。

○四月二十九日には東京に於ては観世の中堅木原康次師の演能会があり、大阪に於ては宝生流の大元老野口師門の宝友社の素人能が催された。「能の本質とその見方」でおなじみの竹腰健造氏は、「安宅延年の舞」を堂々と演じられ喝采を博された。

○猶、四月一日より喜多会が改組され、新しい喜多会として出発した。

即ち、改組後の喜多会は職分は専ら芸道に精進し、会務の運営は主として流内素人有識者に委譲することゝなり、委員は宗家の指名により素人七氏、並びに職分委員として栗谷、後藤の二師に委嘱された。神戸能楽会館の経営も従来能楽師の経営であつたが、此度改組して素人の経営となつた。能楽師が俗務から遠ざかる傾向のあるのは結構なことである。

○本年は梅若実翁の三十三回忌に相当するので その追善能が高輪と厩橋に於て夫々挙行された。

別々に追善能が行はれるのは賑かで良いが、それも梅若問題未解決の為の変態的現象であらう。

○四月を送り五月となると、一番力を入れて謡ふと汗ばむ初夏の候である。

○先づ五月三日午後二時より宝生会能楽堂に於て下掛宝生流の重鎮松本謙三師の催能が左記の番組によつて催され 番組が良いので盛会であつた。

敦盛語入 (シテ宝生 重英)

二人静 (シテ梅若万三郎)

(シテ観世鐵之丞)

綾 鼓 (シテ野口 兼資)

○五月には特筆大書すべき催し一つあつた。東京市市民健全慰安能がこれである。詳細なる点は雑誌「宝生」六月号によつて承知^{ママ}したいが大要を記すと……

東京市に於ては昨年十月より市民健全慰安事業といふのが行はれてゐる。劇に映画に大いにこの事業は活躍をつづけてきた。能楽もその中の一つに加はつ

たのがこれである。

五月二十四日午後六時より宝生会舞台に於て宝生宗家の「安宅」と喜多宗家の「小鍛冶」の二番立で開催された。

はじめは入場料五十銭位を出してもらふつもりであつたが、それでは一般の人々に見てもらへないからといふので無料とし、往復はがきで申込み、返信が入場券となつた。当日は相憎く四時頃から雨となつたが見所は満員。しかも顔ぶれが変はり有意義であつた。先づ村松掛長の開会の辞、宮城遙拝、黙禱に次いで前田市民局長の挨拶があり、いよいよ安宅から始まつた。大成功裡に幕を閉じたのは九時半。更に第二回、第三回と公開され、一般の人の理解の益々深められんことを祈るや切である。

○五月十三日兼て設立準備中の東京古典楽器業組合が正式に成立し、五月二十八日宝生会館に定時総会を開き 引続き組合員従業員の勤続表彰式が行はれた。同組合は時局精神に基づき 能楽雅楽の真価を宣揚し、また営業の新体制の確立を目指して 諸種の事業に着手する由である。

○五月二十四日附を以て東京音楽学校教授の宝生宗家は正六位に昇叙せられた。

○六月は毎年催しに次ぐ催しである。その最終を飾るものとして宝生会臨時演能会がある。これは宝生流の若手楽師が大家に見られない張り切つた熱演を見せて超満員の盛会であつた。一つには料金が大衆的なので 月並能等に見えない人々も安易に見られる気安さからでもあらう。

○六月四日宝生流の職分本間熙師が逝去された。佐渡大夫の名家である。

○以上で大体昭和十六年の半歳を回顧したが、印象に残る第一は能、謡曲が一般化されつゝ、あることが認められる。その結果として臨時の能楽の催しは何れも経済的に成功を取めたやうであつた。又能が単なる娯楽でなく鍛錬の芸術であるといふことがあらゆる点に於て示されつゝ、あることである。

これは新体制の時代に能楽謡曲が立派に栄えて行けることを約束するものである。

【棚町註】本誌には左の二論が掲載されている。

▽能楽界半年の快事、不快事

向陵隠士

— (快事) 供給不足に謡本屋が悲鳴、をよそに非常な繁栄。

(不快事) 大正四年の御大典のお能を絶頂とした能楽界が爛熟腐敗して
梅若問題の醜態を曝露。

▽能楽の行く道

賀来蓮風

— 「高度国防国家の建設」のための「日本精神の昂揚」という急務を果す
ためには「芸と経営の分離」が肝要。

前者の筆者が予告では「湘南隠士」とあることも為念。

第二節 昭和十六年十二月十五日「関西に於ける能の今昔座談会 於 大阪土
佐堀 白蘭」より (『謡曲界』昭和 17 年 3 月号所収)

出席者 大阪府立女子専門学校長 平林 治徳／医学博士 高安 吸江／「能
謡新風」著者 栗林 貞一／堺中学校教諭 岡 緑蔭／浪華商業学校教諭 杉
本藤次郎／沼 艸雨／(速記 佐藤多賀徳)

[目 次] [一] 日露戦争当時の能／[二] 戦時下の能／[三] 鍛 錬／[四]
楽師の指導／[五] 学生能と鑑賞脳／[六] 忠霊と新作能 のうちより

[二] 戦時下の能

沼 本題へ戻して 其頃は大いに恤兵能、義捐能が旺んであつたとして 将来
も現在でも大いにさう云ふ気分が動いて来るんでないかと思ふが、栗林さん
新聞社の方ではさう云ふ意向は動いてをりませんか。

栗林 私の方では未だ何も聞いてゐませんが……

沼 新聞社の様な処から一つ指導的に動いて欲しいと思ひますが 厚生週間の
催しでも東京では他のものは全部止めて能丈けやると云ふことで 能は特別扱
を受けてをるから大に積極的に応援せられる意思があるんじゃないかと思ひま
すが。

栗林 今度の大戦争が起つて最初に誰もが考へたのは、能楽や謡曲を従来通り
やつて行つていゝか何うかといふ事だと思ひますが、私も第一にそれを考へた。
ところが私の社(朝日新聞)でやつてゐる歳末の厚生週間の催について、東京

では、他のものを一切取止めたが、その中の観世流の能と謡の夕だけは予定通り開催する—といふ社告を新聞で見て、これなら大丈夫だと安心した。といふのは、社でこれを決めるには、予め情報局や翼賛会あたりの意向を訊いてゐる、と睨んだからです。果せるかな その後間もなく議会で質問があつて、東条首相は健全な娯楽や慰楽なら、銃後国民の生活に潤ひをつけ、明日への活躍力を養ふために大にやつて宜しいといふ意味のことを答へてゐられます。能謡などは無論この健全慰楽として従来通りやつていゝんぢやないですか。実は、話は細かくなるが 実際問題として、あの宣戦布告された直後は、謡の稽古をつづけるか何うかといふ事が真面目に考へられた。私の社では観世、金剛、宝生の三流の同好者があるが、観世流では大体稽古をやめて、月謝だけは幾らか納めることにしたといふし、宝生でも動揺してゐる。私の金剛組でも当分遠慮したいといふ人が出て、一寸迷つた事でした。

平林 止める止めんと云ふことは信念から出たんでなくて 早く云へば隣組、世間体と云ふことから来てをるんだ。之からの時局としては 玄人としても素人としても余程しつかりせんといかと思ふ。支那事変が起つてから四年半にもなつて 今更覚悟といふのをかしい話だ。本当に高度国防国家の為にいけないことなら 夙くの昔にやめてをるべきだと思ふ。戦争は今始まつたのでなくて 四年半も以前から非常時が叫ばれてをるのだから、必要なりと確信してやるなら今日でもやるべきぢやないか、国全体が忙しくなつたのだから、国防の為に御互ひ全力を尽すべきことは当然だが、今御話のあつた文化を維持するとか、健全慰楽の為に国粹芸術を守る信念があるなら 零細な時間を割いて、人々が他の娯楽に走る間にやるべきぢやないかといふ理論になる。今急にやめなければならんといふのは、どうもおかしい。

沼 私も平林先生が大阪能楽殿の機関誌「大能」に御書きになつた 戦争が済んでからでも芸術が残らんといふことは大国家として恥だからといふさうした事は強調して貰つたらと思ひます。

平林 つまり今急にやめなければならんといふやうなものなら、今迄も良くな

いと思ひ乍らやつてをつたんぢやないかと思ふ 良くないけれども世間が許して居たからこつそりやつて居たといふやうな考の人はこの際断然止めるべきだ。学校教育に関しても吾々はいつも云ふて居るのだが、今迄やつてをつた事を今急にやめると云ふことは 夫れは時局に即応することを考へられたのなら別だが 教育の為に必要なり。又国家の為に必要なりと考へて信念を以てして來た事なら、さう足下から鳥が立つ様に変へるべきものでない。さうたやすく變へる必要のあるものなら 今迄だつて考慮しなければならない筈だ。此際は一つ真面目に考へてやる必要あるが、素人のみならず職分も大いに考へて貰ふ必要がある。職分の考へ方行き方で素人はどうにでも動くものだ。職分が金持の御機嫌取つたり、自己の生活上の都合ばかり考へて、芸道尊重の念に欠けて居るやうな事があるならば、この際、素人の手を引く人も多く、能楽は自然衰微せざるを得ないだらう。

沼 能楽師辺りから決戦体制下としての体制を整へねばならぬ訳ですな。

平林 能楽師各位が芸道を維持鍛錬して守つて行くと云ふ熱意がなければつぶされても仕方がない。明治維新と云ひ日露戦争頃と云ひ先輩は必死の覚悟で国家の為に芸道を守つて來たんでないかと思ふ。

栗林 結局職分人の時局認識といふか、自己の職業認識の程度、心構如何といふ事になると思ひますが、今の時勢のことですから、矢張りこれを統制し指導する機関があつた方がいゝ。それには恰度能楽会といふものがあるのだから、これが大に活動して情報局や翼賛会の文化部など、連絡をとつて、国策に副ふためには如何なる方針でやつて行くべきか、例へば例会能はやるか別会能は止めるとか、上演曲目は何うするとか、献金能や慰問能を盛に催すとか等々大綱をきめて 各流の宗家を通じて職分人に徹底せしめる。さういふ風にすれば、同好者達も安心して観能し、謡の稽古も出来やうかと思ふのです。

平林 確かにさうですね。

栗林 ところが能楽会では一向そんな事はおやりにならないので……。

高安 今迄と事変になつてからと 職分の催は何れ丈け變つたかと云ふと 私

等第三者から見ると一向に変わつてをらん。此際は特によく考へて然るべき実行が必要と思ひます。

栗林 それは矢張り現実を十分認識してゐない為ぢやないですか。

平林 専門家は専門家の如く一生懸命に鍛錬をせんと不可んのに、夫れは第二義的にして 一時凌きばかりしてをる様に見えることが多い。いらぬ事に頭を突込んだりして……。

栗林 大阪の楽師達は陸軍病院などへ無料教授に行つたりしてゐますか。

沼 無料かどうか聞いてをらぬが あるのは有ります。

栗林 名古屋では——田鍋といふ彼地の能楽界の中心になつてゐる人が、愛息を戦死させた関係などもあるにはあるが——相当積極的に動いてゐて 白衣勇士の慰問能、応召将兵遺家族招待能など 何れも全国のトップを切つて催し、普通の催能にも欠かさず白衣の人達を招待し、又楽師が廻り持で一週間に一、二回宛陸軍病院へ無料で謡や鼓の稽古に行つてゐるやうです。大阪や京都では一向そんな話はきかない様だが……

沼 関西楽師の爲めに弁じますが、大阪 京都共に慰問能は度々催してゐますし、病院へも囃子会等をもつて慰問はしてゐます 私は何も宣伝してほしいといふ意味ではありませんが 新聞社あたりはかういふ事は大いに書いてほしいのです。あなたのやうな能楽人であり、新聞人が知らないのが能の現状なのですからね、社会の人が知るだけでも 美しい事は美しい事として映じるのですから、只これを売名に利用するやうなものがある場合は別ですが。

平林 機会を与へたら大阪でも東京でもやるでせうが、行くにしても精神だと思ふ 片方では金持の袖の下を狙つてゐて、さうして世間体を糊塗する為に行くと思ふ事では駄目だと思ふ。此際は生活の切下と云ふことが国家的に叫ばれてをることだが 能楽師自身生活切下を考へるのが根本問題だ 夫れが実現されれば 謝礼見料は少くとも良いといふことになる。夫れがどうも近來芝居の千両役者を真似る様な玄人があるんでないか、何百円呉れなければ出演しないと云ふ様なことが、従つて夫れが見物に掛つて来る。其結果贅沢だと看做され

る。国民と同様に生活の切下を先づ一つやつて 国家の大事な芸術を守ること
に努力する強い精神を見せて下されば 現在は日露戦争時代とは芸術を理解す
る精神が違ふから亡びることはない。

[六] 忠霊と新作能

沼 最後に新作能「忠霊」に就いて願ひませう。新作能を論じてをつたら一晚
掛つても片附さうもありますが、之に就ては前の謡曲界にも色々出てをりま
したから其代表作として「忠霊」を先日舞台に掛つたのをご覧になつた御感想
並に将来の新作能に対する御意見を聞かせて頂き度いと思ひます。

平林 私は残念乍らよう見なかつた。併し斯う云ふ事は悪いことではないと思
ふが 能自体の保存とは切離して考へねばならぬ 斯う云ふものをやつて能を
保存しようといふ考へは根本的に間違つてをる。能の伝統を崩さない様に守つ
ていく一方、どしどし新作も出すやうにすればよい。長い間には良いものは残
つて行くし悪いものは自然淘汰されて一時的の存在でしかあり得ないだらう。

高安 昔から千番以上も能が作られたけれど、今日では二百番程しか行はれな
い。それは一般が新作を好むが、良いものでないと残らぬといふことを語つて
ゐるのです 私は新作賛成でドシドシ作つて上演してほしいと思ひます。大衆
は正直ですから良いものならキット残る筈です。

平林 よいテーマがあつたら新しく作つて上演して見ることも良いのぢやない
か、作丈でなしに上演して見て始めて皆に問ふことが必要だ。

高安 「観世」に出たのを見ると節付が無かつたので、試みに自分で節をつけて
語つて見ると、始め読んだ時より面白さうに思ひ、其後会館での上演を見たら、
流石に鍔之丞氏の好演で実に面白く感じました。其後謡本を購めて更に謡つて
見ましたが、語路の悪い処、文句の冗長な点も多少あり、また謡ひ難い節、尤
も此れは練習すれば良いのでせうが、そんなヶ所もないではないが、今日現代
物を作ると種々困難、つまり不調和な点が出来易いのであるが、此忠霊ではさ
うしたことが一向目立たず、筋も大体に於て無理がないのが良く、又高貴な方
の歌、人口に膾炙してをる歌などを採入れてをるが、中にも北白川の宮様の御

歌などは謡つてゐて実に気持がよろしい。唯慾を云へば処々文句をもう少し簡潔にしてほしく思ひました。

沼 喜多の和氣清麿等にしても公開して皆の意見を聞いて直してをります。忠靈に就いても夫丈けの雅量が欲しかつたと思ひます。慌てゝやつたらしいので不備の点があります。

栗林 さあそれが果たしていゝか何うか。あまり練りに練つて、金城鉄壁にした為に却つて味もそづけもないものになつた例もない事はないんですからな。これは先月の橘香会でも一寸云つた事ですが、私は新才能といふものについて一つの意見を持つてゐる。それは新作をする以上、その内容か形式かに在来のものとは著しく異つた特色がなければ意味がないと思ふのです。所がこの「忠靈」は時が現代であり、そのシテが忠靈といふ。国家の難に赴いて戦死した多くの将兵の忠魂——何々大将とか何々上等兵でなしに、無数の魂の集合体をシテとして人格化してゐる。この二つに大きな特色を見る。従つて大に存在の価値があるものと、私は考へてゐるのです。先日大阪の朝日会館で披露能があり、大なる成功を収めました。私も拝見して非常な感銘を得ました。理屈なしに涙ぐましい気持にさへなりました。尤も慾を云へば高安先生のいはれるやうに、語句に不熟なところがあり、それに文芸的な香の稀薄なことも欠点ですが……

沼 私の云ひ度いのは其処です。忠靈顕彰会所望で作つたといふ趣旨には合致してゐるが、能としての品位其処が強調して欲しかつたのです。能はあく迄、芸術ですから。

栗林 それは矢張作者が職分の人である事にも関係してゐるのでせう。

杉本 特定の人物を取入れずに、我が国民性たる忠勇に取材したのは、たしかにいゝ。

栗林 初めから「忠靈」といふテーマを与へられた為にかうしたいゝ結果になつたのでせうがね。なほ細部に亘つて云へば、クセのアゲハの後の謡が「祭祀がつゞくかつゞかぬか」といふ事に力点を置いてゐるので、非常に力弱い消極的なものになつてゐる。こゝはもつと積極的に出て、如何に尽忠殉国の尊いも

のであるかを高唱強調した高い調子のものにして欲しかった。

高安 もつと堂々と名誉をたゝえるべき所だね。

栗林 それからシテが魂の集合体である為に、一曲としての筋が稀薄で、印象的でない憾みがある。それを救ふために、幸ひ北白川宮様の御歌が取入れられてゐるのだから、その前後に宮様の輝かしい御事績を述べて、御歌とのつながりをつけた方が、御歌そのものをもハツキリさすことになりはしないかと思はれる。今のまゝでは聊か突然の感がしませんか。

高安 さう云ふ点を訂正整理するのも結構ですが、全篇の長さを紙一枚乃至一枚半位短くしてほしいものです。実際ワキの文句など少々長過ぎます。

沼 中入して忠霊塔から靖国神社に変はる舞台の暗転が現はれてをらぬ 間語りとか脇と掛合するとかして現はさないと 靖国の社頭に何時の間にかワキが行つて終ふのは変な具合ではないでせうか。

栗林 これも素人考へですが、物着のあとで、シテが神舞をまふのはいささか可怪しいやうに思はれます。シテは靖国の神霊ですから、自身で神のすゝしめのために舞をまふのは何としても可怪しい。これは多少形をかへて、シテはカケリ位をまふだけにして、神舞は後ジテの出るまでにツレを出して舞はせる事にしては何うでせう。舞はあつた方が賑かでいゝのですから。

高安 天女舞があつて早笛舞働になるといふ形式ですね。神能に神舞は普通ですが 此曲は高砂と田村とが一緒になつたやうなものですから、さうしたことが異様に感ぜられるのでせう。

沼 新しい能だから構はぬと思ひますが。是丈けのものにして正本に組み入れるなら もつと何とかして完全なものにしたかつた 一遍やる丈けなら良いのですが。

岡 併し型は後シテなどで橋掛一杯迄使つて舞台を大きく見せ 一の松へ来て「万歳称へ……」で両手を高く掲げた所は勇壯のあと締めくゝりも出来て面白く思ひました。

沼 型は良く附けてあります。鍬之丞氏壮烈に舞はれて良かつたですね。

平林 私も型は、大体結構だと思ひました。

沼 根本思想が忠霊顕彰にあるので舞ふ人が其気持を持つてやらぬと駄目です。最も良い人に慎重にやつて貰つてこそ良いんでないかと思ふのです。其の点鏡之丞氏はたしかに適任者でした。

平林 最後に、この能は忠霊顕彰会の発案で、三室戸子から観世会へ作曲の御下命があつたやうに、新聞にも出てゐましたが 今から考へるとこれは妥当ぢやなかつたのぢやないですか。この能の本来の使命から考へて、観世会でなしに能楽会へ下命し、各流で協力して作つて、能楽各流全体で謡ひ舞ふべきものだつたとおもふのです。これは私が他の流儀だから嫉視していふやうにとられては困りますが、観世流の独占にしたのは感心しない。他の流儀でもこれに対抗して新作をしたらいゝぢやないかといふ事も云へますが、然し今度の聖戦を題材としては、これ程構想の大きな、国民の誰にもピッタリくるテーマは見つからない。これは呉れぐれも惜しい事をした。實際問題として、これをわれわれが会などで唸らうと思つてもやれないのですからね。

沼 部分的には多少の疵はあつても新作としては良く出来てゐます。実演を考慮に入れてをる丈強みでせう。他にも結構な作はあつても一度舞台を見なければ何とも云へない訳ですから、では余り長くなるから此位で閉会することに致します。どうも色々ありがとうございました。

【ウメクサに】「慰問袋に小型本」

参考資料・一 「真珠湾」直後の〈組合〉書状「阪神能楽組合」書状一紙（昭和16年12月12日）

（封筒）（発）「大阪市天王寺区堂ヶ芝町一二四 大阪能楽殿内／阪神能楽組合事務所

電話 天王寺77九一六〇番／振替 大阪一二二三八七番」（印刷）

（宛）「東京都品川区大井鹿島町二、九四三 江島 伊兵衛殿」（ステンシル）

急告 悪質デマに御注意 決戦下の能楽に就て（本文一紙）（活字印刷）

〔文字大きく、掲示用の文書かとも考える〕

正義の砲刀は愈々暴戾極りなき二大国と 之に附随せる弱小数多の諸国に対し
神の怒りに触れたとも解すべき決戦の爆薬は発火致しました。其劈頭に於て
神国勇武の我軍は 戦史未曾有の最大戦果を収め 日夜進撃 週日を出ずして
前途洋々たる必勝の陣容を確立されました事は 慶祝の詞に絶する次第であります。

就ましては 決戦下の能楽に付き 兎角の論議を風聞し 殊に当組合に対し
直接電話を以て 反能楽の積極的悪質デマを飛ばし 不当千万なる要求をなし
来りたる為 早速当局の御調査を煩しました、茲に其結果を率直に御報告申上
て 此際一層の御努力を以て戦域奉公に邁進せられ 銃後人心の安定に寄与せ
らるゝと共に 非常時文化の死守に御専念あらん事を切望して已まざるもので
あります。

去る九日午後五時過ぎ電話を以て大阪府と詐称し 能楽及謡等の催会は自発
的に遠慮されたく 又此旨を各組合員に通知を乞ふとの 常々当局より御注意
のある 最悪質デマの無頼漢がありました、翌十日大阪府の開庁を待ち 早々
当局に之が真偽が(の) 調査方を依頼し 同十時に参庁の上、課長殿より直接
に御調査の結果を詳細に承りましたる処、各関係課に於て斯様の旨令を発した
る事実絶対になく 別して此種悪質の人心攪乱に対しては嚴重に取締りつゝ、あ
り、今後一層厳にすべしとのことでありました 同時に保安課の能楽に対する
御意向をも併せて伺ひましたる処、平素と特別に変化の状態を見せず 決戦下の
建実なる国民慰楽として 人心の安定上最も必要事と考察し 能楽関係者一層
の努力をこそ切望するが 希くは

一、決戦下に相応しき曲目の選定に其宜敷を得る事

二、催会に対する会場は能楽殿の如き能楽道場としての完備せる施設道場に集
中開催されん事

三、万不止得一般会合場等に於て開催の場合は 入場料の有無及能、囃子、素
謡等の別なく 一応所轄警察へ届出を願ふ事

右の次第に付き 今後の催会は道場主義強化の方針を堅持し 一般社会の誤解

を招かざることに御留意願ひまして、本日の新聞記事にもあります 戦時下の
娯楽は旺盛にとの情報局発表の如く 催会遠慮の如き誤解をも一掃願ふと同時
に華美、遊民的な娯楽状態を相戒め 心からなる能楽報国の実を挙げて頂くや
う 呉々も御願ひする次第であります。

尚前述の如き悪質デマは勿論 苟も戦時下総動員部の一部門に特設の文化事
業に対し私見を以て論難する事は 国家総力の一部に停止的障害を与ふるもの
にて 此方面取締嚴重の折柄 各位充分の御注意を喚起致します。

又万止なく一般会場に於て催会の場合 其届出は統制的に当組合が代行届
出をなし 万遺漏なきを期し度いと存じますから、必ず組合へ御申告の程を併
せて御注意申し上げます。

昭和十六年十二月十二日

阪神能楽組合

各 位

参考資料・二 「東京大空襲」後の〈同好会〉書状

【棚町註】前書状は開戦直後。保安課との好関係に御注目。後は終戦も
間近か。「お美事」と感じた。末尾会費の一行「ナカセル」。

観世喜之（観世九臈会）書状 一紙

昭和20年4月5日（謄写印刷・手書き）史108・「戦争ノ影響ヲ受ケタル能番組
六種」の内より

謹啓 陽春の候 各位愈々御清適之段奉慶賀候 戦局は愈決戦の段階に到達致
し 国民の緊張今より深き秋は無之と存候 斯る時機に際し 私共芸能を以て
奉公致す者 その進退亦今日より至難の時は無之と存候

若し夫れ一步を誤れば 五百年の伝統を持つ世阿弥以来の能楽は其誇を失ひ
明治維新以後先輩諸師の身を以て護られ 今日の榮え有りしを 將に衰退に陥
れべく 惟ふに我が能楽こそ 斯る難局下 人心を鼓舞激励し 或は又沈着に

導くべき唯一の芸能たるを疑はさるものに候

目今交通不便又は日々の空襲等のため 折角の私共の決戦的演能にも御来観の
少き嘆き有之候も 前述の抱負を以て 敢て毎月の演能を続け 人心を和げ
以て報国の誠といたし度と存候

諸彦も亦私共の微衷を汲まれ 振つて御来観給り度御願申上候 更に又現下の
帝都を守護せらるゝ一般の方々を御慰め申上度存候間 会員の方々に於かれ御
知友沢山御誘引下され度御願申上候

◎尚此の際 今期分御会費未納の方は 乍恐縮 今月度に於て御下渡下され度
御願申上候 敬具

昭和二十年四月五日

観世 喜之

観世九阜会

四月の番組を申上ます

能 組

仕舞

狂言

放下僧 川本 彦作

酔 薑

野村 万蔵

網之段 遠藤 知久

観世喜之

山 姥 渡辺 政男

田 村

近藤 季雄
野島 信 島田巳久馬
北村 一郎

海ゆかば

会日 昭和二十年四月十五日（第三日曜）午前十時始

会場 観世九阜会能楽堂

九 阜 会

当日空襲警報発令サル、コトアルモ 午前中ニ解除ノ場合 解除後二時間ヲ
待チテ演能可仕候

第二章 明治天皇と能楽（附・梅若流と満州、「夏爐冬扇」ほか）

〈その一〉明治神宮奉納芝能（芸談）

（『謡曲界』昭和17年2月号より）

梅若 六郎

明治神宮が御創建になりましたときから、私はなんとかしてこの御社前に能楽を奉納申し上げたいと永年希望いたしてをりましたが、やうやく多年の念願がかなひまして、神祇院指導課の御幹旋により、十二月六日午後一時から内苑旧謁見所御座所前の芝生で、宮内省はじめ各省関係諸名士陪観のもとに奉納能をおつとめいたしました。

奉納能は、梅若流ばかりでなく、各流でもその希望を持った方が居られたやうでございましたが、私ども一門の手で奉仕いたしましたことは身にあまる光栄でございます。

梅若流は樹立以来、言ふに言はれぬ苦しい道を歩んで参りましたが、その苦心が実をむすんだわけで、たゞたゞ嬉し涙にむせぶばかりでございます。

芝能の順序を申し上げますと、明治天皇御製成歎賦 昭憲皇太后御作平壤の二曲を私が謹んで独吟いたし、次は「翁弓矢立合」を景英、武久、安弘の三人で舞ひ、キリは半能「小鍛冶白頭」を景英のワキで私がつとめました。

御製 御作は 両陛下が明治二十八年に広島大本営でおつくり遊ばされたもので、ときの内大臣秘書官桜井能監氏に節付せよと仰せになり、桜井氏が謹んで節付申し上げ観覧を仰ぎましたところ 両陛下は更に、私の父、実に節付をせよとの御下命がございました。父は光栄に感激して謹曲申し上げたのでございます。

明治二十九年に伏見宮邸へ行幸啓遊ばされました折、父がこの二曲を御前で奉吟いたしました。そのとき父が楽屋で、もし文句を間違へたら大変だと非常に心配してをりましたのを、私はよく覚えてをります。このたび私が、玉座御前で奉吟する光栄に浴しまして、亡父はさぞかし喜んでをること、思ひます。

キリの「小鍛冶」は最初「土蜘蛛」の予定で御座いました。それは、明治天皇

の最初の天覧能が父の「土蜘蛛」でその子方を私がつとめ、最後の天覧能に私が「土蜘蛛」を舞つてをりますので、「土蜘蛛」の上演はひとしほ意義ふかいものと思つたからでございます。ところが野外能ですから、もしも風が強く吹くやうなことでありますと、巢がシテにかゝる心配があると、注意して下さつた方がありましたので、いろいろ相談いたしました結果、時局との関係もありますので、名剣にかゝる神徳加護の物語「小鍛冶」の半能としたやうなわけでございます。

舞台は芝生に棕櫚繩を以て、本寸法による舞台の区画を作り、橋懸は三間、柱は青竹を用ひました。奉仕者は白襟紋付上下、履物は全部福草履を用ひ、むすぶのは不吉といふことでして糸でとめました。

芝生の能ははじめてなので、どんな具合のものかと心配いたしましたが、演じをはつた後で皆様のお話を聞きますと 非常に出来がよかつたといふことで、こんな嬉しいことはございません。お弟子の一人は、先生、芝生の能は拍子の踏み方が違ふのですか、先生が拍子を踏みましたとき地響きがしました。と申してをりましたが、私は特別に力を入れたのではございません。全身全霊をうちこんで演じましたので、全身の力がさうした強い拍子を踏ませたものと思つてをります。

先日ある方が私のところへ見えまして、息子さんが三人で翁を舞ふことの出来るのは、先生のところ以外どこにもありませんよ、お家繁盛のめでたい徴しです。と言つて下さいました。ほんたうに嬉しくなつて有難涙がこぼれました。この度の一世代の光栄を深く心に銘じ、益々能楽発展のために力をつくすやうにと、三人の息子達に諭した次第でございます。(文責任記者) (pp.6～7)

〈その一A〉グラビア 明治神宮奉納芝能—光栄の梅若流—

わが能楽史上画期的な「明治神宮奉納芝能」が昨年十二月六日午後から明治神宮内苑神域で梅若流宗家梅若六郎氏以下一門四十名によつて厳肅に演能された。

奉納能は修祓に始まり、陪観者一同礼拝の後、最初は明治天皇御製「成歓駅」 昭憲皇太后御作「平壤」（ともに故梅若実謹曲）を梅若六郎氏が奉吟し、次いで梅若景英、梅若武久、梅若安弘三氏の「翁・弓矢立合」があり、最後は六郎氏の「小鍛冶・白頭」 ワキ景英氏で演じ、陪観者一同に多大の感銘を与へて奉納能を終了した。

「グラビア」「成歓駅」「平壤」を奉吟する梅若六郎氏

「翁・弓矢立合」向つて右より梅若武久氏／梅若景英氏・梅若安弘氏
「小鍛冶・白頭」梅若六郎氏 (pp. 60～61)

〈その二〉厩橋彙報 梅若通報部 (『謡曲界』昭和17年2月号より)

○東日主催“梅若能”

東京日日新聞社主催の“梅若能”は、来る二月十三日夜、九段下軍人会館に於て催される事に決定しました。

東日の最近の方針では、能楽界の事には全く手を染めぬかの如く、一般に見られて居り、能評の如きも最近では、掲載されてゐませんが、昨年末当流が神祇院指導課の斡旋によつて、明治神宮最初の法楽能（芝能型式によつて東京に始めての記録を作つたもの）を奉仕致しました時、神祇院と流儀との連絡について、絶大の尽力をされた事から、今回の主催能とまづ進展したのであります。

この事は当流のみでなく、汎能楽界にとつて祝福さるべきだと思ひます。何故ならば、大新聞社が能楽から追々手をひく現状にあるので、是が積極的に運動に乗り出したのは、能楽の前途に佳き傾向を作つたといひ得るからであります。いはば、東朝能無き今日、斯界の催演に一企画が増された訳で、意義重大なものがありませう。而も聞くところによれば、東日の年中行事として、主催能を行つて行く事にならうとの事であります。

○法楽能の大衆公開

右の“東日主催能”の第一の目的は、明治神宮法楽能が非公開で行はれたので、それを大衆に報告する意味で、その番組通りを、後演する事にあります。さ

れば、謹厳裡に奉仕したその実況が、はじめて大衆に見られる事となりませう。

第二は法楽能そのものが、国民への健全娯楽に直ちに置き替へられますので、今日の世情に適はしい娯楽を提供をする事にあります。そこで、更に意義を深める事に於て、能一番が追加される事になりました。それは“船弁慶”となる筈です。従つて、番組は

御製 成歎駅

御作 平 壤 独吟 梅若 六郎

弓矢立合 梅若 安弘／梅若 景英／梅若 武久

半能 小鍛冶 梅若 六郎

能 船弁慶 梅若 景英

となる予定です。

○大東亜戦争最初の献金能

右の能、第三の目的は大東亜戦争への完遂と、皇軍の大捷に感謝する意味に於て、能界最初の献金催演とするにあります。

このために宗家は無料出演を快諾されました。東日の斡旋によつて、当流が第一にこの挙に出られた事は、誠に意義が深いものといへませう。

料金は従来行つて居る大衆能同様のものとなりませう。

東日紙上の発表を是非御覧の上、大々的な御後援を御願ひ申上ます。

○二月の定式能

二月の定式能は“御国光”が宗家によつて上演される予定です。時局柄その上演は期待されませう。

この曲は日清戦争の時、毛利元徳公が新作されたもので、実翁の作曲になるものであります。筋は総督の宮様が侍臣に命じて司令官を召し、大勝の模様を聞召され、司令官が立つて喜びの舞を舞ふのです。新作能が支那事变以来出来ましたが、何か歴史は繰返すといった感があると、某故老は語られました。

この日平井宗一郎氏の“藤戸”が披かれるとの事です。 (pp.75～76)

〈その三〉 明治神宮法楽能奉納 グラビア (『謡曲界』昭和18年1月号より)

明治神宮法楽能奉納は神祇院指導課と東京日日新聞の幹旋にて一昨年に引きつづき旧臘も七日午後一時から梅若流宗家梅若六郎氏以下一門四十名によつて明治神宮内苑旧謁見所御座所前の芝生で演奏された。

この栄の奉納に先だち御前十一時半 梅若六郎氏以下家門一同ならびに中島神祇院教務局長、阿部東日社主幹等は恭しく拝殿に額づき玉串を奉奠、神霊に對し奉り芝能の奉納を言状した。午後一時修祓があつて、梅若六郎氏は、芝生の中央に正座し、明治天皇御製「成歎賦」並に昭憲皇太皇后御作「平壤」^{ママ}を奉吟、つゞいて尚武の思想を盛りこんだ弓矢立合を附加した「翁」及び「猩々」を奉吟した。写真は梅若六郎氏の御製、御歌の奉納。

【棚町註】「平壤」は明らかに「平壤」の誤植である。

〈その四〉 能界展望 ○明治神宮法楽能 (『謡曲界』昭和18年12月号より)

梅若流宗家が明治神宮に奉納を許可された法楽能の第三回が十一月三十日午前十時から明治神宮内苑旧謁見所御座所前にて例の如く謹演された。番組は、

(能)	翁・弓矢立合	梅若六之丞
		梅若 武久
	菊 慈 童	梅若 六郎
(独 吟)	明治天皇御作 平壤	梅若 六郎
(仕 舞)	昭憲皇太后御作 成歎賦	梅若 六郎 (pp.42～43)

【棚町註】前項「壤→壤」の誤植どころか、このたびは明治天皇御製と昭憲皇太后御作の題名が入り違っている。「陞→陸」の誤植で社長の首がとんだ時代——新聞社では「陞下」という二字一字の活字まで作っていたとか——まことに驚くべき誤植である！

〈その五〉 夏爐冬扇

(『謡曲会』昭和17年11月号)

榊 精之助 (梅若流師範)

能楽協会との妥協未だ纏らず、独立独歩何者の束縛も受けず 吾が意の儘に動き得られる梅若は寧ろ今日最も幸福な境地にあると云へるのではあるまいか。曩には

明治神宮に芝能の奉納を勤め、近くは東宝との提携で街頭進出を断行、ガツチリ大衆と結び附いた此クリーンヒットは他流の好むと好まざるとに関せず確かに素晴らしい発足であると云へやう。

能舞台以外の演能が斯界の一部に相当問題になつたとしても 之は余りにも頑迷な保守主義者の自縛論であり、軀ては自縄に抛て自らの墓穴を掘る結果に終りはせぬだらうか。能楽は元、田楽、猿楽が洗鍊整備せられ、其俣数百年の伝統を続けて、今日に来つたものだと識者は教へて居る。假令武家の式楽となり、武家統領の扶持を受けた時代があつたとしても、必ずしも今日猶其俣旧慣を保守して高く留つて居られねばならぬ理由は見当らぬ。若しも大衆演能が能楽精神を害ふものがありとするならば、それは演者其者の心掛けに抛るものであつて、大衆能なるが故に害はるべきものでは無い筈だ。尤も既設能舞台以外にあつては、設備等の関係で充分の妙技を示し得られないことはあり得るにしても 能楽精神に叛くものでは無からう。

満州事変一支那事変一大東亜戦争と挙国一致 凡有艱難を克服して亜細亜の、進んでは世界の盟主たらしとする祖国日本は 今將に凡ての社会機構の再編成を要請せられつゝある秋である。古典芸術だ、世界に誇る最高の芸術だと自惚れて見ても 肝心の国民大衆に結び附けない芸術では困り物だ。(さりとて私利私慾の爲め 矢鱈に貪り取らん爲めの大衆能では一層困る。何処迄も純真な芸術心に立脚したものでなければ) 今国防国家凡ての職場に全力を傾けて職域奉公の誠を捧げ居る国民大衆の心眼に能楽精神を注入して、眞の日本人としての心の糧とすることこそ 此未曾有の非常時に於ける芸術報国であらうではないか。

× × ×

昭和六年秋九月十八日夜十時、奉天郊外柳条溝に満州事変発端の一弾が轟いてから満十一年に成る。此轟音こそ將に王道楽土満州建国の素因を為すもので

あり、早くも本年は其十周年を迎へ 数々の慶祝行事が執り行はれつゝある中に 宗家梅若六郎師が慶祝芸能使節に選ばれ十月十日、十一日の両日国都新京に、十二日大連、十三、十四日奉天に於て、所謂日本古典芸術たる能楽を以て、慶祝奉仕をなすことに決定せることは 能楽界の為に誠に欣びに堪えない。顧れば梅若と満州の因縁は仲々に面白いものがある。若宗家景英師、武久師が始めて大連の土を踏んだのが恰も柳条溝突発事件が漸く居留民の耳に入り 呆然として居る十九日の朝であつた。此大事変の突発に 果して奥地の演奏が出来やうかと、関係者の頭を悩めたものだが、各方面の御支援の下に 予定通り初の満州演奏旅行を終へたこと等は 最も感慨深い思出の種である。続いて昭和十一年十一月には 宗家六郎師が自ら其一門を引連れ来満 初の能楽大会を各地に張行、更に一昨昭和十五年六月には 皇紀二六〇〇年紀念催能として、再度満州各地に其妙技を示して 在満の同好を喜ばして居る。此催しには大満鉄会社が社員精神作興の一助として 異例の支援を与へられ 一同を感激したものだ。今日満州の斯界の發達の陰には、常に此大満鉄会社の大きな力が動いて居ることを、忘れてはならぬ。

事変突発直後、硝煙の真只中に始めて満州の土を踏んだ梅若宗家側^{注)}が、満州建国十周年の慶祝芸能使節に選ばれたことは誠に因縁浅からぬものがある。願はくば芸能使節の名を辱しめざるやう 一切の私慾邪念を廃し、奉仕的精神を以て一意専心慶祝能に全力を尽されんことを望む。

夏爐冬扇の言葉は、無用の長物を意味するが、横紙破りで鳴らした元禄時代の奴連中、土用の真最中襦袢姿で火鉢を抱え 熱燗で氣焔を挙げ、冬は降り積る雪を眺めながら 暑い暑いと浴衣一枚で扇を使ひ 冷酒を煽り、文字通り夏爐冬扇を實踐して 瘦我慢振りを發揮したとか、吾を亦之に倣つて求められた謡曲界の責を果さん。(昭和十七年九月二日)

【棚町註】「側」の一字がたいへん目についた。前半の「若宗家」と「六郎氏」を書きわけけるための一字であろうが、この文章の書き出しから、対抗意識が洩れ出た「側」を消されない。この文章、『謡曲界』の管見では一番つ

よい印象を得たので、あえてこちらに収めた。梅若流「師範」の注記があり、文章から在満古参の人と思われるが、そのキャリアを示す記事はなかなかみつからず、7月15日、大連能楽殿の「梅若景英師歓迎謡曲会」の冒頭・素謡「清経」の3人目にかろうじてその名を見出した。満州の演能記録を、悉皆網羅データベースに残す奇特家はいないかと思ふや切。

〈その六〉 謡曲と白衣

舟橋 信三

私が相模原陸軍第三病院へ参る様になつたのは昭和十三年の暮でした。職業準備教育室主任の柏木中佐殿のご紹介で、始めは白衣勇士の慰問のつもりでしたが、十四年一月より嘱託講師として辞令を戴く光栄に浴した次第です。毎週一回出講、月日の立つのは早いもので足かけ五年になります。こちらはいつも変らないのですが、受講者は全快すると、次々と退院し、人数が減ると又希望者を募り、入り替り入替り尽くる事なく、今日まで続けて居ります。

講習時間は午後一時半より四時まで。

受講者はいつも時間前に講堂に静粛に集合、他に見られぬ規律正しく皆真剣の様敬服の外ありません。

今更申までもありませんが、多くの勇士の中には、うでや足のない方もあり、手や足は有つても神経をうたれ自由のきかない方もあり、何れもお気の毒な方ばかりにて 何とお慰め申してよいやら其言葉もない位です。其他家庭の事情などをもお察し 何ともお気の毒で、屢々袖をぬらす事もありました。

然し、流石は皇軍の勇士です。いつも皆元気一杯で、恢復を待ち、或は原隊へ戻り再起奉公さるゝもあり、又退院後職業戦線に起つもあり、皆勇氣澆刺たる有様です。此の人々はお国のため、何れも一度も二度も生死の巷をくゞり、死線を越へ靖国の英霊とならずとも、戦場に於ては奮戦又奮戦と、言語に絶する労苦艱難を^(ママ)偲び 其上骨、肉、或は手、或は足、或は神経、と言はず身体の一片を、み国の為めに捧げたる武勲赫々たる人々許りでありまして、此の神のご

とき勇士各位に対してはいつも、尊敬と感謝と同情の念に打たれるのです。然し講習に当りては講師でもあり、教官たる以上遠慮なく厳しく、殆ど休憩の時間も無く続けざまに指導いたします。

当今殊に人数も増し 従つて皆熱心にて自然、熱が上り過る事もあり 途中で気がつき我にかへる事も度々あります。

只惜しい事には、少々上手になつた頃には、先生永々御指導戴きましたが、近々退院いたします。有難う御座いましたと、挨拶される時、それはお目出度う御座います。お大切に、申すものの又いつ逢ふ事かと思ひますと淋しい感じが起ります。然しやつぱりこれがお国の為にも目出たいのであります。

いつも講習を済して宅へ戻りました時の気持は、神詣でをして戻つた時の様な心境です。

私如き拙ない業を以て、この尊い方々を御指導申上る事は洵に光榮に存じます。

殊に不図も本年春には畏くも従軍徽章迄下附せられまして 一層感激に堪へない次第であります。是皆天の御指命と心得 益々精勵奉公致したい存念に御座います。

国のため身をいたつけるものゝふの／白き姿を神とあがめて

元來陸軍第三病院に於ける謡曲講習の目的は、傷痍軍人の健康保全、呼吸機能増進、精神修養は勿論、趣味向上のため 情操教育として、殊に日本固有の武士道精神である。最高芸能^(ママ)を学び、人格の陶冶と観察力創造力を涵養し、各職場職域を通じ国家社会のため旺盛なる活動力を与へ、更に入院患者として之が為、精神的創痍の治療に寄与し、傷痍軍人として更生の実を収むるに貢献せんとするにあると云ふたてまへで、単に慰安や娯楽のみではないのであります。

殊に第三病院の患者は既に、御承知の事と思ひますが、云はゞ仕上^{ママ}げの傷兵だけに 皆元気澁刺青壮者も及ばぬものがあります。従て入院期間も半年乃至、一ヶ年位で退院となるのです。

教授方に就ては種々研究の結果 まづ曲目を左記二十番を選定しました。

初級 鶴亀、猩々、橋弁慶、土蜘蛛、吉野天人、紅葉狩、鞍馬天狗、小袖曾我、羽衣、田村

上級 小鍛冶、夜討曾我、七騎落、杜若、舟弁慶、桜川、熊野、八島、楠露、高砂

先づ始めは発声の練習。鶴亀、猩々、橋弁慶、などを一句づゝ口移しに声調を目的とし、然る後段々練習を重ねるに従ひフシや音階の説明。

ヨハ吟、ツヨ吟のフシ扱ひの相違。次第、一セイ、下歌、上歌、クリ地、サシ、クセ、ロンギなど。

二三の例を上げ部分的によく呑み込める様に説明、仮に土蜘蛛の次第がわかれば紅葉狩の次第も諷へるツヨ、小袖曾我の次第がわかれば高砂の次第も諷へると云ふ様にサシ、クリ地に於ても各、約束の扱ひ方、又フシの姿につき、一字落、二字落、入三ツユリ、半ユリ、本ユリ、尤も初心者の二段落シなどは図解説明、文章の生、死、については特に注意し、なんとしても、短期間に何とか仕上げ、退院後郷里へ還つて、独吟の一つでも立派に諷へる様にと努力して居ります。

演能も毎月宗家定式には御招待戴き見学、春秋二回のお素人能の際は特に勇士の素謡を組入れ舞台にて発表、いつも好評を博し、当今は一層の熱心振りにて相当の成績をあげ 益々研究に邁進して居ります。

扱前に述べました通り、わずかの期間の講習に過ぎませんが、それでも今迄謡曲の何物かを知らなかつた人々に之を講習せしめた結果、全快後、全国各地に散らばつて行く之等白衣勇士の中に、まかれた種は恐らく、必ずやいつの日か国家の為にも何物かを齎すべきものと考へて独り楽しみに存じて居ります。

一昨年になりますが、若宗家景英先生、「羽衣」放送の時、私ワキを務めました事が有りましたが、直後「那須」から嘗て病院で講習をした一人から、久しぶりに先生の謡を拝聴し、其當時を偲び誠に懐しく思ふたとの手紙を貰ひ何とも云へぬ嬉しさを感じました。又愛知県出身の須藤と云ふ上等兵からも帰郷後先生の御丹精により講習した高砂を既に三度も婚礼の式場で謡ひました

との報告をよこされまして 思はず須藤氏の得意の様子を想像して 微笑を禁じ得ませんでした。

最近南方へ赴任された〇〇軍医中佐殿からは左様なお便りに接しました。
前略 渡満後は御無沙汰に打過ぎ誠に申訳無之候、今回南方に転任の為め東京に立ちよりしも何かと出発準備に諸所に飛び廻り終に御伺ひするの時間を得ず失礼且つ遺憾の至りに御座候、明早朝空路出発致し候 参考本一冊行季^(ママ)に入れ、印度まで響けと彼の地にて謡ふ予定にて御座候「略す」
など誠に痛快に存じて居る次第であります。(筆者は臨時東京第三陸軍病院梅若流謡曲講師)

【棚町註】ドウリットル空襲やミッドウェイ海戦のころの『謡曲界』には、もっとずっと面白い(慰問能)記事がのっている。能が狂言になったら観客がホッとしたとか、謡曲の〈浪曲訳・浪花節ヴァージョン〉をまづ教えて本文に入ると判りがよかった、とか。本稿に「より大切な」記事かとも思う。なぜ。軍病院における謡曲指南が、軍公務として認知されていたということの後世に証明するためである。従軍記章とは、今日、文化功労者候補の名優や教授のムラサキ(紫綬褒章)と同じようなものだからである。人数はケタ違いに多くても、天皇からいただく、勲章に準じるものであったから。従軍慰安婦には……、などとは申しませんが。

なお、為念。舟橋氏は在郷軍人であったか、どうかもたしかめねばならない。もっとも、旧軍曹の棚町のカンでは、この人の文章には「であります」調、長州方言から帝国陸軍「方言」になる、が弱いようである。氏の受軍記章が「軍務歴」に関係あるなら、もっとこの方言が出ている筈とも思うからである。

第三章 「技芸者之証」問題

昭和十六年二月、大阪府の興行取締令発令に関し、同二十日、「能楽の特性事情を具申し 特殊扱として黙認方」を請願したところ、審議の参考とし

て提出を求められた理由書。[三月～五月の間に提出カ] ワラ半紙に和文タイプ謄写。共紙表紙トモ七枚。附の書状は同じくタイプ印書の一紙。保安課長を通して「従来の状態程度に黙認」諒承の旨が伝えられている。

〈その1〉『能楽ノ特異性理由書』【江島氏の封筒に「陳情書」トアリ】

附・昭和16年6月9日付組員宛書状

拝啓 初夏之候愈々御多祥奉賀上候

陳者 去る二月大阪府発令の興行取締令施行に関し 当組合は同月二十日 能楽の特性事情を具申し 特種扱として目〔黙〕認方を請願致候処 御指示により 之が参考として 能楽の特種理由書を提出し 専ら御検討を願ひ候結果 本日（昭和十六年六月九日）当組員名簿の納附を完了致し 同時に 大阪府保安課長緒方正太郎殿より

能楽の特種事情を諒し 従来の状態程度に黙認を願ひ得る事と相成候趣き御示達有之候間 右様御諒承 御門下各位へも宜敷く御伝へ被下度候、尚時局益々重大化と共に国内諸般の取締確保の必要は一般社会人の想像以上の情勢なれば 各楽師は能楽界内規の厳守は勿論 社会情勢の変遷に従ひ 臨機に処する自肅自制に就ては 能楽精神に立脚し 確固たる覚悟を以て 能楽職者の統合機関に協力せられ 組合は又之が統制に万全を期し 能楽特種事情諒諾の真意を無為に帰せしめざるやう切に希望す

との同課長殿呉々の御訓示に候へば 組員各位の自肅自制と 組合に対し全幅的御協力之程 茲に右報告と共に併て御願申上候

敬具

昭和十六年六月九日

阪神能楽組合

能楽ノ特異性理由書（表紙共紙）」

（本文）

昭和十六年 月 日

阪神能楽組合

大阪府知事 三辺 長治殿

一、能楽ノ特異性御認承願ニ付申請理由之件

能楽ハ元來諸種ノ特異性ヲ有シ 普通興行物トシテ成立シ難キ事情ニアル芸術ナルハ周知ノ事実ニシテ 寧現下ノ超非常時ニ際シテハ 最大保護ノ御見解ヲ以テ御考慮ヲ願ヒ度キ次第ニ御座候

抑々能楽ハ日本独自ノ文化ノ形成ニシテ 最モ古キ歴史ヲ有シ 日本精神ヲ一貫シタル我国々体の芸術トシテ 畏クモ国語統一社会調整ノ大御心ヲ奉ジテ大成シタルコトヲ文献ニヨリテ拝伝致シ居ルモノニ候

別シテ此处ニ特筆スベキハ、洵ニ畏キ極ミナルガ、明治二十八年日清役ニ際シ」(1オ)

明治天皇、広島大本營御駐輦中 我軍勇士ノ勲功ヲ嘉シ給ヒテ 謡曲「成歎駅」ヲ御製遊バサレ

昭憲皇太后ニ於カセラレテモ「平壤」ヲ御作シ給ヒテ 何レモ楽師ニ下シ給ヒ 御節附ノ大命ヲ拝シ 楽師ハ唯々恐懼 異常ノ感激ヲ以テ斎戒沐浴シ 御節附ケヲ奉仕シ奉上セルガ

明治二十八年十月八日伏見宮御邸ニ行幸啓ノ砌 故梅若実翁「御製ノ聖二曲」ヲ拝吟シ奉リテ天聴ニ達シタルヲ始メ 我大阪ニ於テハ 明治三十六年四月二十日閑院宮殿下ヲ総裁ニ推戴セル第五回内国勸業博覧會開催ニ当リ行幸ヲ仰ギ奉リシ時

御製「成歎駅」ヲ蓄音機ニヨリテ慎ミテ叡聞ニ供ヘ奉リ 御旅情ヲ慰メ奉リ

最近ニ於テハ 昭和十二年十二月九日 東京日比谷公会堂ニ於テ 出征皇軍將士慰問献金能楽ニ際シ 帝国芸術院會員梅若万三郎師拝吟シ奉リ 拝吟者ハ長袴姿(謡吟ニ於ケル最高礼服)拝聴者ハ全員起立ノ裡ニ終曲シ 暫シハ只無言ノ内ニ熱涙湧キ 光景感激其ノモノナリシト云フ、之真ニ国体明徴芸術ノ本質ヲ立証スル 我能楽界破格ノ恩典」(2オ) 光輝ニシテ 斯道ニ於テハ乱リニ拝吟シ得ザル最モ重キ、「宝曲」トシテ万世ニ伝ヘテ奉仕スルノ覚

悟ヲナシ居ルモノニ候【別掲「明治神宮奉納芝能 梅若六郎（談）参看。】
今此ノ至尊ノ「御製」ヲモ普通市井ノ遊芸ト同一ノ御扱ヒヲ受クルニ於テハ
斯道職者ノ責務上 職域奉公ノ觀念ノ上ヨリモ 畏多キ事ト存ジ候
尚以下能楽由来^(ママ)ノ該要ヲ述ベテ其ノ本質ヲ具申シ 併セテ能楽本来ノ芸格ト
楽師ノ職責及其ノ生活様式 並ニ斯道ノ規律等ノ特異性ヲモ 亦別ニ項目ニ
列記シテ御清判ヲ希フ次第ニ御座候也

能楽由来^(ママ)ノ該記

一、能楽ノ発祥

能楽ハ其ノ源ヲ神楽ヨリ発シ 往古ハ専ラ神事ニ奉仕セルモノニシテ 人皇
三十四代推古天皇ノ御宇、泰河勝ト云フ人 大命ヲ奉ジテ日本六十余州ノ言
葉ヲ集メ 歌詞トナシテ作曲セリト伝フ 之レ我国々語統一ノ最初トモ見ル
ベク 更ニ此ノ歌謡曲ニ義理人情ノ風姿ヲ含マシメ 型付ヲ施シ 橘ノ豊日
宮殿前ニ於テ 歌舞ヲ奉仕シテ観感ヲ辱ウシー面社」(2ウ) 会人心ノ調整ニ
尽ス処多ク最モ古キ一大文化事業ノ性質ヲ有セルモノナリ

二、能楽大成ノ基礎

吉野朝時代ニ至リ 益々其技倆ノ洗練サル、ト同時ニ 文学ト宗教及芸術ニ
非凡ノ才能ヲ有セル観阿弥、世阿弥父子ノ出デ、 我ガ国体ノ本義ヲ強調セ
ル神祇物ヲ根本トシテ能楽ノ基礎ヲ作り 指導階級ノ唯一ナル教養ト厚生ノ
機関トシテ 時ノ將軍ヨリ保護ヲ受クルニ至リ 著シキ発達ヲ来シ 遂ニ諸
般ノ形式ヲ調ヘ完成ノ域ニ達セリ

三、武道ト能楽

最モ士氣旺盛ナル戦国時代ニ於テモ 武道ト能楽トヲ併行シ 陣中ニ能楽ヲ
演ゼシメ 以テ士氣ヲ鼓舞シ 武道ト文化ノ両用ニ供シテ重キヲナシ 武家
ノ式楽トシテ公式ニ制定セラレタルハ 当時ノ文献ニ徴シテ明カナル所ニシ
テ 江戸時代ニ入テモ 其ノ平和期ヲ迎フルニ當リ 士氣ノ文弱ニ流ル、ヲ
恐レ又一面ニ武人教養ノ為メ 武家式楽ノ制度ヲ強化シ 文武両道ノ政治的
部門ニ重要ナル位置ヲ占メ 楽師ヲ遇スルニ士」(3オ) 分ヲ以テ扶持シ帶刀

ヲ許サレ居リタルモノナリ

四、江戸時代ノ勸進能

偶々勸進能トシテ民衆ノ觀覽ニ供スル開催ノ場合ハ奉行之ヲ司リ 総年寄町世話役ノ手ニ依リテ拝観符ノ配布ヲ扱ヒタルモノニテ 現今ノ官営ノ形式ニ等シク 又勸進能ノ見付櫓ニハ矢車ヲ高々ト掲ゲテ櫓印トナシタルモ亦武道的芸術ヲ表示セルモノト云フベク 其ノ威風堂々タルハ人ヲシテ衿ヲ正サシメ 之ガ觀覽ヲ御能拝見ト称ヘ 凡テ服装ハ礼服ナルノ規定アリタレバ 庶民ノ人口ニ紋切紙ヲ便宜発売シ 人々之ヲ平服ニ張り附ケテ拝觀シタル風情ヨリ見ルモ 当時一般ノ興行物ト比シテ雲泥ノ差アリシコトヲ知ルモノナリ

五、幕末ト能楽

前述ノ状態ニ於テ為政者ノ保護ト監視ノ内ニ育成サレタル能楽ナルニモ不拘 其ノ内容ニ於テハ当時ノ主權者ニ諛フコトナク 能楽ノ根幹タル国体明徴ノ本義ニ立脚シ 皇道精神ヲ一貫シタルハ偉ト称スベク 幕末尊皇愛國論沸騰セル際ニモ 能楽ヲ精神作興ノ趣旨ヨリ擁護セラ」(3ウ)レ 明治ノ初期ニ於テ既ニ再度ナラズ御前演能ノ光榮ニ浴シタルモ 永劫不滅ノ能楽精神ガ然ラシムル所以ナリト確信スルモノナリ

六、明治時代ノ能楽ノ光榮

畏クモ 明治大帝ハ能楽御保護ノ大御心ヨリ 明治十七年頃以降ハ年毎ニ天覽能ノ恩命ニ浴シ 破格ノ恩典ヲ蒙リタルハ 等シク現存知名人士ノ腦裏ニ銘記セル所ニシテ 今ノ能楽会ハ此ノ天覽能ノ御下賜金ヲ基礎トシテ組織シ 大御心ヲ奉ジテ国粹ノ文化ニ尽瘁シ 明治中期後ノ能楽ノ維持發展ト能楽界内ノ規律嚴守ヲ堅持シ 今日ノ旺盛ナル能楽時代ヲ築キ上ゲタルモノナルガ 此ノ間ニ於テ 一方帝國議會ニ於テモ約三十年前ニ能楽保護法案ノ成立ヲ見ルニ至リ東京音楽学校ヲ經テ能楽会ニ国庫ヨリ補助金ヲ附与セラレ 其ノ活力ニ絶大ノ好果ヲ収メ 現ニ其ノ補助金ニヨリ養成セラレタル第一期ノ樂師ハ今日ノ能楽界第一線ニ活躍シツ、アル状態ニテ 旧幕時代ニ於ケル權能者ヨリ受ケ居リタル保護ノ比ニアラズ 今ヤ八紘一字ノ大御心ヲ躰シ 我

国本来ノ特色ヲ發揮セントスル際 世界ニ誇ル我国固有ノ国粹芸術トシテ其ノ」(4オ)至高ノ位置ニアル能楽ノ責務モ亦極メテ大ナリト思惟スルモノナリ

能楽特異性ノ別記

一、能楽ハ神社ノ神楽、仏閣ノ法会ノ式等ニ始マリ 今モ式楽ノ気分ヲ維持セルコト

一、能楽ハ幽玄ヲ第一トシテ 象徴の精神的ナルヲ以テ其ノ最タル特色トシ 直感的ナ刺激ヲ与ヘザルモノニシテ 普通興行物ノ如ク低級ノ娯楽心ヲ満足セシムルモノニ非ズ 最モ厳肅ナル自制心ヲ醸成スル点ニ於テ 興行政策ヨリ出発スルハ其成立不可能ナルコト

一、能楽ハ鍛錬芸術ト称スベキモノニシテ 其構想ト芸味ニ於テ高雅ナル為メニ 何等ノ用意ナキモノニ面白味ヲ感ゼシムル能ハズ 観覧者ニ於テモ相当ノ鍛錬ヲ要シ 少クモ坐禅ノ修練ニ相似タルモノアリテ 観衆ト楽師トガ一体トナリテ能楽ニ帰一シ 始メテ其ノ妙味ヲ感ジ得ルモノニテ 此点ニ於テモ一般観衆物トハ懸ケ隔リタル特異性ヲ有スルコトニ依リ 普通興行物トナリ得ザルコト

一、前述ノ如ク表面ハ至極無味乾燥ナルニ反シ 内面的ニハ頗ル精細ヲ極」(4ウ)メ 人的物的共ニ予想以上ノ費用ヲ要シ 而モ前項ノ理由ニ於テ得ル処最モ僅少ナレバ 経済的ニモ興行物トナシ難ク 又興行主トナリ得ル機関ノ成立ハ絶対ニ不可能ナルコト

一、能楽殿ハ武道ノ道場ト同様ノ特種構造ト設備ヲ要シ 能楽道場ト称シテ 稽古ト錬磨ヲナスノ道場ニシテ其ノ練成セラレタル芸事技倆ヲ斯道ノ支持後援者ニ試験の観覧ニ供スルモノニテ 観覧ヲ本領トセズ 自然普通観物場トシテハ維持シ難キコト

一、能楽ノ演技ハ能楽道場ニ於テナスヲ原則トシ 仮リニ学芸の演技場ニ於イテ止ムヲ得ズ演能ノ必要アル場合ト雖モ 特ニ能楽道場独特ノ設備ヲナサザレバ演能セザル規定ヲ厳守シ 純然タル演芸場ニハ断ジテ出演ヲ厳禁シア

ルコト

一、能楽ノ観覧ハ斯道ノ維持及奨励ニ対スル後援其ノ他社会公共ノ為メニ組織サレタル機関ノ主旨ニ賛成シ 之ヲ賛助入会シタル者ニ限り出費ヲ乞フノ会員制度ヲ厳守シ 未ダ曾ツテ普通興行政政策ヲ以テ演能シタルコトナク 又斯道ノ規定ニ於テモ此ノ点ヲ固ク禁ジアルコト」(5オ)

一、能楽師ハ能楽ガ六百年ノ永キニ亘リ政治部門ニ参与セル芸事ノ慣習ニヨリ 斯道内部ニハ嚴格ナル徳義の規定ヲ設ケ 自肅統制ニ万全ヲ期シ 苟モ能楽道ノ規律ヲ乱シタルモノハ其ノ職ニ止マルコトヲ得ザル機構ヲ以テ組織サレアルコト

一、能楽師ハ技能ノ錬磨ト趣味者ノ指導ヲ第一義トシ 演能ハ其ノ結果ノ現レ又ハ研究ノ意志ニ於テ開催サル、ヲ原則トシ 興行政政策ニヨル演能ヲナサザルコト

一、能楽師ノ収入ハ能楽ガ興行政政策ヲ以テ成立セザル理由ニ於テ 楽師モ亦演能ノ舞台収入ニ依ルヲ得ズ 従ツテ能楽開催ノ収入ハ能面能装束及小道具類並ニ能楽道場ト楽師養成等ノ維持ニ当テ 生活費トシテハ斯道教授ニヨリテ得タル謝礼金ヲ以テ支持シアルコト

一、以上ヲ以テ大要項目ヲ具申シタルモ 最後ニ特記スベキ要項ハ

能楽及ビ謡曲ニ伴フ品格ノ問題ガ最も重要ナル事項ニシテ 普通遊芸ニハ見ラレザル高雅ナル品格ヲ具フルガ為ニ 高貴ノ御前ニ於テ演奏スルニモ相応シク 華族軍人其他指導階級ノ家庭ニ入りテモ弊害無ク」(5ウ) 近年全国ノ学校内ニ非常ナル勢ヲ以テ普及シ 中ニハ正課ニ謡曲ヲ入レアル情勢ニアルハ此ノ品格アルガ為ナリ、若シ其ノ師匠タル楽師ガ他ノ遊芸ト同ジク遊芸人ノ御扱ヒヲ受クル事ニナラバ 右ノ品格ハ忽消磨シテ貴顕一般家庭学校等ニハ不適當ナル感ヲ醸成スル懼レ濃厚ナリ、換言スレバ能楽道活殺ノ重大分岐点ナルヲ痛感シ 特ニ御考慮ヲ願フ次第ナリ

右

昭和十六年 月 日 」(6オ)

第四章 新作能（その一）「忠霊」について

試演から発表まで

（『観世』昭和17年1月号・特集より）

懇談会 試演は十月十一日、大曲の舞台で行はれたが、それに先立つて九月二十二日、原作が成ると同時に、その相談をかねての発表懇談会が催された。観世会から鍔之丞氏を始め委員が出席し、在京の三役代表者諸氏と顕彰会の役員諸氏とを招待したのであった。

晩翠軒の広間で一同の席が定まると、まづ浅見委員は、顕彰会の諸氏と三役諸氏を紹介し、次いで鍔之丞氏は主催者として一言挨拶を述べ、之に対し顕彰会の末松中將は答礼をかねて「忠霊」能発案の趣旨を述べて三役の協力を希望された。さらに三室戸子爵はこの計画の仲介者として今日までの経過を説明し、尚一同を激励する辞を述べられたのである。

食卓を囲みながら一同は「忠霊」の原稿を手にしていろいろ意見を交換したが、その結果、十月十一日に試演を行ふことに決定を見たのである。

試演 は別掲番組の通り行はれたが 何分新作ではあり、謡本もまだ出来ないで、舞台には大分カンニングが流行つた。然しそれも微笑ましい新光景である。見所には忠霊顕彰会の菱刈大将以下の諸將軍、産婆役の三室戸子爵、宗家御隠居、母堂を始め職分諸氏が、この新作能の成果如何にと見まもつてゐられる。その他月並能には見られない珍しい顔触があつた。

ニュース撮影 日本ニュースで「忠霊」をトーキーに撮るといふので、大曲の舞台で分家鍔之丞氏のシテに宗家元正さんのツレで開演された。随分と大仕掛なものであるが、流石に科学の力はえらいもので、数日後には市内のニュース映画に「忠霊」が現れて、謡を知るも知らぬも感激を新にしたのである。

謡本献上 謡本発行所では顕彰会菱刈大将のお話で、宮中へ奉る忠霊謡本の謹製に取かかったが、それが漸く出来上つたので、十一日の朝、菱刈大将閣下の先導で三室戸子爵閣下に率ひられて宗家観世元正氏、分家観世鍔之丞師が、発行元檜常之助氏を連れて宮中に謡本を献上されたのであつた。

奉納 十一月十一日午前十時出演者及び関係者一同が靖国神社に参集、拝殿

でお祓をうけ御神酒を戴いて、旧の能楽堂から移された由緒も深い能舞台で鍔之丞師のシテ、宗家のツレ、野島氏のワキで奉納された。見所のない能舞台は、ほとんどの神事能の感じで出演者一同森厳な気分で一曲を勤め了へたのであつた。拝観は神社の御意向で関係者三十名を限るとの事で、顕彰会々長菱刈大将以下の役員 三室戸子爵、宗家母堂、観世編集部数名が天幕張の中で端然として控へ 正面には宮司鈴木大将御夫妻と御令嬢もゐられた。なほ当日は斎藤茂兵衛氏奉納の新調の装束を用ひられたが、その装束一式を出演者と共にお祓を受けたのであつた。

地謡囃子方はみな上下で着座 一同平伏 御前かゝりの礼を以て始演したが、この崇敬な態度は蜩集した各社のカメラ班に、我が古典芸術の崇高を知らしめるに十分だつた。終ると鈴木宮司は幼年宗家元正氏に慈愛の眼ざしを以て挨拶をされた。宮司を中に一同記念撮影して 直ぐ発表会々場華族会館へ向つた。

発表会 三回とも超満員の盛況で社会の汎ゆる階級の人々、諸外国の大使公使が見えた事は別項の通りである。之程の盛況は曾つてない事であると会館の人が言つてゐた。(p.20)

靖国神社奉納 (十一月十一日 於靖国神社舞台) 観能月評「東京の能 三宅 襄」より

▲忠 霊 (観世鍔之丞氏)

旧舞楽堂から更に数丁北西の方へ移された能舞台は、我々には懐かしい思出の舞台である。見所のないホントの神社の能舞台に見るこの奉納能は、内容からも一入の感慨をうけたのである。

シテ観世鍔之丞、ツレ観世元正、ワキ野島信、間狂言山本東次郎、大鼓安福春雄、小鼓北村一郎、笛井寺政数、太鼓金春惣右衛門の諸氏、地は藤波順三郎氏を地頭に宗家直門の諸氏が謡つた。一同まづ舞台に入つて坐着くと正面へ向つて平伏、神霊に黙祷を捧げた。我々は大空の下に立つて、吹く朝風に総身を緊張させて見物した。僕は試演を加へてこの新作能を数回見たが、この奉納の神舞ほど気持ちの良いのはなかつた。

能の新作は今まで問題にならなかつた。たまたまあつても能界一般からは黙

殺された。それは内容の点もあるが、一流の家元が取上げなかつたことが主要な原因だらう。今度は観世流が宗家が新作として最初から手をつけたところに重大な意義がある。古い能の形式に現代の思想を盛つた内容を当嵌めたことは、当事者も第三者も非常な冒険たることを自認した。ところがこの「忠霊」の舞台を見るとその危険の念は薄らいだ。

少しもをかしなことはなく、なかなか面白いと思つた。勿論いろんなアラもキズもある。それは在来の作にだつてあることだから、時間が経てば作者の方で直して行くことだらう。細かいことは言はぬが、ともかく「忠霊」は舞台上せて成功した曲といつてよい。(p.129)

忠霊発表会（十一月二十二日 於朝日会館） 「関西の能 沼 艸雨」より

▲忠 霊（観世鍔之丞氏）

此の曲に就ては既に詳説せられる所があらうから略す。シテは追に鍔之丞氏で前後共立派、但し此の曲は謡や、型を問題にする前に、編曲の動機を思ひ絶対精神の崇高さによつてのみ謡はれ舞ふによつて光彩を放つものと断じる。此の曲の普及を急いで不用意に各地で演じる事は曲の価値を低下さす事になるのを戒めねばならぬ。鍔之丞氏のシテ山階氏のツレ、福王氏のワキ、織雄氏の地、かうした顔ぶれによる此の曲なら立派なものである。この日の鍔之丞氏のよさは全く織雄氏の地によるものであると信じる。繰り返すが忠霊は演者一同の精神のみに依存する曲である。(p.137) (『謡曲界』昭和17年1月号)

「東京の能 三宅 襄」より (『謡曲界』昭和18年2月号)

忠霊奉仕能（十二月二十五日）於 観世能楽堂

所謂一日戦死能で、観世流の観世友資、坂井音次郎、武田太加志、浅見真健、山階信弘の五氏が催した献金能である。収益の全部一千余円を即日忠霊顕彰会に献金したのは、非常に時宜を得た企てだつた。能楽社会は斯ういふ方面に頌冠りをするなんと、非難をうける傾向にある際だから、ドシドシやるがいい。ヘンな能楽仲間の申合せなど無視して可なり。世間から指摘されるやうな規約はない方がいい。

▲楠ノ露（武田太加志氏）【青葉繁れる桜井の……散るは涙か鼻汁か歟。省略】

▲忠 霊（坂井音次郎氏）

このシテは、芸の外貌が左近氏によく似てゐる。達者なところ、一寸小手を利かせるところなど然うだ。「忠霊」は重い曲でもない、面倒な心持もないから、それほど深く考へる必要もないかも知れないが、根本の問題として此際一つ篤と慮つて貰ひたい。

いまのいきかたは、今の中はいゝ。所謂花のある間はよからう。だが五十を過ぎ六十を超えた時に、花は萎むてしまふ。その時になつて果して今のいき方で宜いか、つまり今のいき方でやつて行つて、その時に差支へないか。このことは光門会全部に亘つて考へて貰ひたいのである。

▲石 橋（半能）（山階信弘氏）[省略] (pp.72～73)

‘42. 12. 5 各地通信 「師走の大能 沼 艸雨」より

大詔渙発一周年記念会 大阪能楽報国会は必勝完遂の聖業翼賛として表記の会を十二月五日大阪能楽殿に開催、国民儀礼、挨拶の後、大阪警備府参謀、佐藤中佐の講演「大東亜戦第一年を顧みて」を聴き、大きな感激の内に、引つゞき、宝生流の羽衣（辰巳孝一郎氏）と観世の半能忠霊（大西信久氏）を鑑賞、来会者一同の絶讃を博した。

新作能（その二）「皇軍艦」について（観能月評）「東京の能 三宅 襄」より
新作皇軍艦発表会（五月二十六日）於華族会館恩賜能舞台

▲皇 軍 艦（梅若万三郎氏）

佐古海軍少尉の原作「赤道神」を観世鍔之丞氏が作曲した新作能であつて、「忠霊」発表に準つて、上演三回を繰返した。シテは万三郎、久太郎、鍔之丞の三氏、艦長は鍔之丞、直次郎、十三の三氏、龍神は万佐世、啓次、織雄の三氏といふ顔触だつた。地頭は織雄、順三郎、要之助の三氏が勤めて、観世総出演の形である。

管界に舞台経過を報告して置くことにする。

初めに一畳台が舞台大小前に出る。一声で艦長を先頭に、航海長、砲術長、上

官、士官、甲板士官、下士官（間狂言）の順序で登場して、橋懸で一セイを連吟する。扮装は厚板に大口法被で太刀を佩くが、艦長のみは半切、士官は側次を着る。艦長は正で名のつて、サシを謡ひ、下歌から連吟になる。道行の上歌で舞台へ入つて赤道に着いた態で、謡一杯に脇座に着き、艦長は床几にかけ、一同は次に下居する。

かくて艦長は甲板士官 赤道祭の準備を命じ、士官はこれを更に下士官に伝達し、下士官はこの旨を布告した後、赤道祭の謂れをクサリ述べる。大蔵の山本東次郎氏 和泉の野村万蔵氏が交互に勤めたが、何れも穏当な立シャベリだった。

狂言のセリフがすむと、艦長は床几の俣 正に外して、赤道の諸神を勧請する意の謡を地と掛合に謡ふ。

出端の囃子となつて、シテ赤道神が現れる。唐帽子に白垂、面は悪尉、袷衣に半切、鹿背杖をついてノツシノツシと出て来る 張良の黄石公に似た扮装だが、位は鞍馬の白頭か 橋懸一ノ松に立つて「そもそもこれは」と名のり、地との掛会の後、立廻を舞ふ。万三郎氏が、「赤道神とは我が事なり」とトンと突いた杖は利いた。それに何といても、此人の声調は素晴らしいものだ。堂々としてゐる。

立廻のトメに台へ上つて床几にかける。赤道神の降臨である。床几にかけたシテは大日本を讃崇し、米英の非望悪虐を責める謡となり、クセに移つて上ゲ端の前に杖をすて、後で床几を下りて所作がある。万三郎氏が「悪鬼外道を撃滅し」と胸ザシして拍子を強く踏んだのは、いかにも敵国降伏の念に充ち溢れるものだつた。

シテは幕へ向つてサシて、龍神を呼び出す 誰だか忘れたが、こゝで強く踏み開いて、足をひろげシツカと幕へ見込んだのは少し行き過ぎではないか。龍神を呼び出して日本の軍艦を試めさせる、という心持は シツカリした型、謡を以て表現されるべきではあるが、しかし強く凄いいものではない筈である。

龍神は謡はないが、甚だ儲け役だ。早笛で出て来て舞台一杯に立ち働き、な

は舞働を舞つた上に、キリに又謡につれて型があるからだ。龍神に働かせて暴風雨のさまを見せる手法は能の勝れた方式である。

地謡は始めから終りまで大馬力である。柔吟は一つもなく、強吟で、しかもかゝつて行く氣勢の烈しいものだから、かなり骨は折れる。

航海長と砲術長のあやかし問答があつてこれを制へて艦長は諸神に祈念する。「かくて艦長は艦橋に立ちて」と艦長は床几を立つて正に出る。橋懸に寛いでゐた龍神が又舞台に入つて来て、嵐の猛り狂ふ様子を象徴する動作の後、一散に幕へ走り込む。「霹靂一声雷雲避けて天日皓々輝きわたり紺碧の海は展けた」と艦長は雲扇して向方を眺め、大小打上になるところは、なかなかよく出来てゐる。作者としても此処は会心の個所に違ひない。

シテは台を下りて「げに頼もしの兵や」と艦長以下を煽ぎ出て、赤道通過の鍵を渡し橋懸へ行く。一ノ松へノリ込、双ニーケンしてヒラいて「虚空を遙かに上らせ給へば」と幕へ入る。キリは「海行かば水漬く屍山行かば草むす屍大君の」と艦長はカギを頂いて大君に忠誠を誓ひ奉り一同も辞儀をする。鍔之丞氏は鍵を指揮刀にして型をする。

こゝに谷村氏が下居して礼をした型をとる、大槻氏のは少し曖昧で表現が中途半端だつた。このキリで上手い型をした谷村氏も、道行のトカに空を仰いだり波を見廻したりするのは慾ばりすぎる。あそこは余り型のない方が宜い。

総じてシテは橋岡氏のが面白く、何といふか一種の味があつた。(pp.51～53)

○新作能「皇軍艦」公開一・ 能界展望 『謡曲界』(昭和18年5月号)

佐古海軍少尉原作、観世宗家作曲に係る新作能「皇軍艦」は、朝日新聞社主催、海軍省後援、能楽会協賛の下に、輝く海軍記念日の前日(五月廿六日)華族会館恩賜能楽堂にて一時半、三時半、五時半の三回に分ちて公開、各方面の名士を招待して観覧に供する筈。出演者は、梅若万三郎、観世鍔之丞、梅若万佐世、橋岡久太郎、大槻十三、観世織雄、谷村直次郎、島津啓次の諸氏。

○大阪能楽会の建艦運動の熱意一・

大阪能楽会所属の楽師諸氏は、文化報国を一步進めて建艦運動に協力し、献金能に参加奉仕してゐる熱意に対しては 洵に感激措く能はざる所である。即ち、二月廿七日の生一家一門による奉仕を始め、四月十七日と廿四日の両日には大西家、五月一日には公和会、五月廿九日には山本家、六月十日には観能会が奉仕する。

*** 討議要旨**

横手一彦氏は、①戦前期の旧内務省検閲、戦時期の情報局による言語統制、戦後期のGHQ検閲という、三つの言語管理システムの共通点と相違点は何なのか、②こうした言語管理システムは今回のテーマである手紙や日記にどのように影響し、若手研究者はいかにアプローチしてゆくことが可能であろうか、と質問した。